

平成27年度「都道府県・政令指定都市犯罪被害者等施策主管課室長会議」

平成27年5月22日（金）

中央合同庁舎8号館1階講堂

【犯罪被害者遺族(途切れない支援を被害者と考える会 代表 近藤さえ子氏の手記)】

(稲吉久乃氏による代読)

近藤さえ子と申します。私は犯罪被害者の遺族で、本日のテーマである「被害者ノート」を作成した途切れない支援を被害者と考える会の代表をさせていただきます。

本日は大事な会議にお招きいただいていたにもかかわらず、外せない仕事が入ってしまい、急遽欠席することになってしまいました。誠に申し訳ございません。私も、国と地方が一体となった犯罪被害者等施策の推進を図ることが急務であると考えていますので、本日のこの会に皆様と御一緒できないことはとても残念です。どうか、被害者の心情と稲吉さんの講演を聞いていただき、被害者支援の推進について改めて考えていただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

では、我が家に起こった殺人事件の話をしてします。

私の主人は、自然に恵まれた地方で育ち、大変鍛えられた身体を持ち主でした。大手商社に勤めていました。仕事が忙しく、毎日夕食もとらずに11時ごろに帰ってくるという仕事をしていました。夜中の2時ごろに帰ってきて朝の5時には出ていくなどということもありました。私の友人たちは声をそろえて、あんなに働く人は見たことがないという働き者でした。

主人は休日も仕事のことが多かったのですが、子どもたちと過ごせる時間はいつも優しく、全力で遊んでくれました。子どもたちはそんなお父さんが世界で一番好きでした。そして、私も、いつも仕事ばかりと文句を言いながらも、誰よりも一生懸命働いている主人のことを誇らしいと思っていました。

そんな主人が忽然と姿を消してしまったのは、2004年、今から11年前、11月24日のことでした。その当時、主人は、元上司が会社の商権を持ち逃げして会社をやめてしまって、会社側の訴訟担当者となって働いていました。主人はその商権を取り戻そうと何度もフィンランドの会社に行き、それこそ死ぬ思いで交渉を続けました。北欧行きのそのスケジュールは、ホテルで寝る間もないものであったと聞いています。そのような努力から、遂に元上司からその商権を取り上げ、会社に戻すことができた。その裁判の和解が成立する日に主人は忽然と姿を消してしまいました。

主人がいなくなって2日後から我が家に警視庁捜査一課の女性刑事が泊まり込むようになりました。電話には逆探知が取り付けられました。御近所で聞き込みが始まりました。私たち家族は、警察から口どめをされて、誰にも主人がいなくなったことを告げることはできずに普通どおりに暮らすことになりました。私は普通どおりに区役所に行き、子ども

たちはふだんどおりに学校に行き、御近所の方が私の家に対して不思議な気配を感じて、聞かれると、「どうもこのあたりに泥棒が入ったみたいです、それで捜査をしているのですよ」などと嘘をつきました。裏のおばあさんの家は、泥棒がいるのではと窓に鉄格子を入れました。主人の田舎から両親も出てきて我が家に泊まり込みました。主人のお父さんは家にはじっとしてられないといって新宿中を歩き回り息子を捜しました。辛い、ただただ警察が見つめてくれるのを待つだけの時間でした。

しかし、私は、もし主人が事件に遭ったとしたら、それは元上司の仕業であるということだけは確信していました。警察は元上司の近辺を捜査していました。しかし、主人はなかなか見つかりません。一体どうしてしまったのか全くわからない状態が続き、行方不明から1カ月経ったクリスマスの日、お父さんの帰りを待ちわびている子どもたちのもとにお父さんは遺体で帰ってきました。

これは裁判が始まってから分かったことですが、主人は11月24日の夜、帰宅途中に元上司の甲が雇った若者5人に我が家の前から拉致をされ、車に押し込まれ、ガムテープでぐるぐる巻きにされて殺されてしまったのです。甲が雇った若者、Aは甲の親戚で当時29歳、その友達のB（24歳）、Aの麻雀仲間のC（29歳）、D（23歳）、Dは県立高校卒業の神童と言われた男だそうです。やはり麻雀店でアルバイトをしていた男です。そしてもう一人、大学理工学部中退のE（23歳）です。彼らは甲から10万円をもらうことを条件に主人を拉致してくることを引き受けたのです。それぞれがたまに飲みに行く程度の付き合いの関係でした。主犯の甲はエリート商社マンとして56歳まで働いていた優秀な人間です。この男のたった10万円をくれるという誘いを、ほとんど仕事らしい仕事をしてこなかった若者5人が引き受けたのです。余りにも人の命を何とも思わないこの若者たちの存在に私は驚かされました。10万円もらえば、人を殺すことも躊躇しないのです。

主人が行方不明であった1カ月は大変辛い日々でした。しかし、主人が殺されてしまったことが分かった後も想像を絶する日々が待っていました。まず、ずっと一緒に過ごしてくださった捜査一課の刑事は引き揚げていってしまいました。主人が活着ているか死んでいるかわからない辛い時間でしたが、活着ているかもしれないというわずかな希望のある時間をずっと女性刑事が私に寄り添ってくださいました。食事を作ってくれたこともありました。しかし、遺体が発見されて犯人が捕まると、唯一頼れる存在であった方が私の目の前からいなくなってしまうました。確かに警察は犯人を捕まえるのが仕事ですので、犯人が捕まれば、いつまでも私の家に通ってくるわけにはいかないのです。

刑事はいなくなり、我が家には事件を知った知り合い、御近所の方などが頻りに訪ねてきました。主人の実家からは7人が葬儀のために出てきました。私は家中に布団を敷き、10人以上の食事の支度をしました。皆泣いています。私はひたすら、「ごめんなさい」と言いながら、毎日毎日、来てくれるお客様にお茶を出しました。皆さん、私の家族のことを心配してくださいました。でも、皆さん、何をどうしていいかが分かりません。もちろん、私もどうしていいか分かりません。殺人事件の後にはどのように進むか誰もわからない

のです。

私にとっては毎日が地獄の日々でした。事件後の事務処理が私には次々とやってきました。主人が使っていたパソコンはパスワードが分からずに開くこともできません。銀行、携帯電話、保険、株など、40歳のわずかな財産でも、本人でないと自由に解約することもできません。大変な事務量の仕事が待っていました。役所には、死亡届から始まり、各種書類を、ぐるぐる階を回って提出しました。窓口の方も涙をためた状態で手続をしてくださいました。毎日毎日、40代の1人の人間をこの世から消す作業です。それ以外に私自身の仕事もしなければなりません。私は毎晩2時ぐらいにやっとお風呂に入り、疲れて、このままここで寝てしまえば死んでしまう、そうしたらどんなに楽だろうと思いました。でも、お父さんを殺された子どもたちのお母さんまで死んでしまったらあの子たちはどうなってしまうのだろうと思い、毎日やっとの思いで生きていました。

娘は、誕生日に外食をして、「何でも好きなケーキを頼んでいいのよ」と言っても、「お父さんが食べられないから私もいらない」と大好きなケーキも食べません。主人がいたときには大喜びであった外食も嬉しくありません。主人がいたときは、みんなでケーキを取り合っ、お皿まで食べてしまうかの勢いであった子どもたちは、お誕生日のケーキも要らないのです。ただただお父さんに帰ってきてほしいのです。

それから、世間の人楽しい行事、運動会、学芸会、入学式、クリスマス、他の子にはお父さんがいるシーンに出会うたび、子どもたちは辛い思いをしてきました。どうして私たちはこんな悲しい思いをしなければならないのでしょうか。

2月には、加害者の親や甲の家族など計10名ほどが家に「謝罪に来たい」と言いました。私の父が「絶対に家には入れない」と言い、家の前の主人が拉致された現場の隣にある公園で会いました。来て、土下座をして謝った家族は1家族だけで、主犯甲の家族に至っては「もうあの人とは関係ありませんから」と言って帰りました。何でそんなことを私たち家族は聞かなくてはならないのでしょうか。2月の公園はとても寒く、80になる父は次の日には具合が悪くなってしまいました。

被害者遺族が加害者遺族たちを家に入れたくないと思ったとき、謝罪に来たいと言い張る加害者の家族にどのように対応すればよかったですのでしょうか。自分の家に入れることは耐えられません。加害者を家に入れずに加害者家族に会うには、私が近所のファミリーレストランに案内するのでしょうか。それとも、公共の施設の集会室の予約のために私が並んでくじを引くのでしょうか。

私も、事件発生後、急遽、知り合いの弁護士にお願いしました。しかし、殺人事件を取り扱った経験はなく、6人の加害者についている複数の弁護士に1人で対応するのは大変だったように感じます。手探りの状況で、被害者の私を守ろうと必死にしてくださったように思います。とにかく弁護士も私たち遺族も殺人事件は初めてなのです。何が何だかわからないままに加害者側の国選弁護士を含む複数の弁護士、殺人事件のプロに言われるまま動かされていたような気がします。

そして、裁判が始まり、迎えた判決は余りにも軽いものでした。主人には何一つ落ち度がなく、全てが犯人たちのせいであるにもかかわらず、主犯甲懲役17年、副主犯A懲役13年、B、10年、そして、拉致を手伝った3人の若者は懲役6年でした。犯人たちは前科がなく、家族が被害者の家に謝りにも行き、裁判長は淡々と流れに沿って刑を言い渡し、まじめに刑務所を務めれば刑期よりもっと早く出られますよと励ましのお言葉付きでした。主人は社会でまじめに働いて殺されて、人を殺した人が刑務所で短い間働けば、反省もなく再犯のおそれがあっても私たちの社会に帰ってくるのです。私たち犯罪被害者遺族は、犯罪被害者とその遺族が進んでいく社会の仕組みを、前に進めば進むほど、この社会がおかしいこととぶつかっていきました。

私は犯人たちがうらやましくて泣きました。食事の支度をしなくていいのがうらやましい、夜中まで事件の後片づけの仕事をしなくていいのがうらやましい、安全な刑務所の中で国が更生するために全力で守ってくれているのがうらやましい、被害者や被害者遺族に比べて加害者たちはうらやましくて仕方のないことばかりでした。被害者遺族は誰が守ってくれるのでしょうか。

私は中野区で議員を務めさせていただいていますので、もし中野区でまた我が家のような事件が起こってしまったら、私のような大変な思いをする人が出るのを少しでも防ぐことができなかと考えました。私は議会で訴え、2009年4月、中野区に犯罪被害者等相談支援窓口をつくることができました。事件発生後、この窓口で連絡さえすれば、区の職員が被害者支援を勉強されていますので、何でも理解して対応してくれます。区役所には会議室もあります。もう吹きすさぶ公園で加害者の家族と面会しなくてもいいのです。警察や裁判所など犯罪被害者に係る手続、病院などへの付き添いもしてくれます。また、犯罪被害者等の支援に精通している機関の紹介や事務連絡もしてくれます。この窓口ができたことで中野区では飛躍的に被害者支援の体制が整いました。途切れない支援を被害者と考える会もできました。